

氏名	北川依子
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第146号
学位授与の日付	平成12年1月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科英語学英米文学専攻
学位論文題目	'Fiction in Transit: Reevaluating Elizabeth Bowen's Novels' (「移動するフィクション——エリザベス・ボウエン論——」)

論文調査委員 (主査) 助教授 佐々木 徹 教授 中村 紘一 助教授 若島 正

論文内容の要旨

序 論

エリザベス・ボウエンは位置づけのきわめて困難な作家である。一般には英国風俗小説の系譜に属するリアリズム作家とみなされてきた。しかし、ボウエンの文学は初期作品からすでにそのような枠組みには収まりきらない要素を多分に持ち合わせており、特に後期の小説においてこの傾向は強まる。にもかかわらず、多くの批評家はボウエンの作品を既存の枠に押し込めようとし、そこからはみ出る部分を欠点として退けてきた。こうした姿勢がテキストをありのままに読むことを妨げ、先入観によって歪曲してきたのである。1973年に亡くなって以来、ボウエンは保守的でいささか時代遅れのマイナーな作家として忘れ去られる傾向にあった。

90年代に入ってようやく、従来のボウエン批評を問い直す動きが起りつつある。これらの研究は、キャンノン形成の過程でボウエンの作品がいかにか歪められてきたかに着目して、さまざまな角度からこの作家を見直そうと試みている。本論では、こうした最近の研究成果をとり入れつつ、ボウエンのよりラディカルな側面に光をあてることにより、この作家の再評価を試みる。その際、ボウエンが〈主体〉というものをどのように理解し表象したかに焦点を絞りたい。モダニストより一世代遅れて世に出て60年代末まで執筆を続けたボウエンは、20世紀中葉のモダニズム以降の小説の推移を自らの多彩な作品のうちに映し出す存在として、ひととき興味深い作家である。以下の章では、ボウエンの四つの小説を年代順に考察していくことにより、著者の主体の理解がどのような変遷をたどったか、また、それが作品中の人物表象にどのように現れるかを検証する。

第一章 アングロ・アイルランドと「欠如の発見」—『最後の九月』—

ボウエンの第二作『最後の九月』(*The Last September*)は、後の作品で展開される主題の萌芽を数多く内包する重要な小説である。著者のアングロ・アイリッシュという出自に関わる伝記的要素をもっとも明白に取り入れている点でも注目に値する。内乱のさなかの1920年、アイルランド南部にあるプロテスタント地主の屋敷ダニエルズタウンを舞台に物語は繰り広げられる。作品の重点は内乱の歴史的考証よりはむしろ、主人公ロイスが支配階級(アセンダシ-)の孤立と衰亡を徐々に理解する過程におかれている。そして、ロイスが自国の現実に目覚めていく経緯は、彼女が女性としての「欠如」を認識する過程と並行して提示される。これまで『最後の九月』は、主にアイルランドの歴史的背景と関連づけて読まれてきた。また、最近ではフェミニズムの視点からの研究も増えつつある。しかし、この作品の重要性は、これら二つの分野がヒロインの自己の探求において緊密に結びつくことを示した点にあると思われる。本章では、アングロ・アイリッシュとしての、そして女性としての欠如をロイスが見出す道程が交錯することに注目して、読解を試みる。

ロイスは思春期によく見られる二つの相反する欲求——所属と安定を求める願望と拘束から逃れたいという願い——の間で揺れ動いている。ダニエルズタウンは最初にはロイスにとって安定と秩序の象徴であった。しかし、反乱兵との二度の遭遇

を通じて、彼女は自分の属する階級が崩壊の危機に瀕していることを学んでいく。また、ゴシック的雰囲気**の強く現れる水車小屋の場面では、アセンダンシーこそがアイルランドの衰亡を招いた責任者であること、さらには、その階級が17世紀の強制的入植と搾取という罪を背負っており、そもそも空洞の上に成り立っていることを、漠然とではあるが理解するにいたる。**一方、ロイスの第二の覚醒の過程は、英国兵ジェラルドとの恋愛をめぐる展開される。ロイスはジェラルドの安定性に惹かれ、彼が自分を守る帰属場所 (home) だと感じている。しかし、ジェラルドは紋切り型の女性像しかもたえず既成の価値観を無批判に受け入れているため、ロイスは次第に疎外感を覚えるようになり二人の恋愛関係には破綻が訪れる。^{ナショナルリテイク}国籍に関する分裂した意識と女性としての疎外感とが相乗して、ロイスのアイデンティティーの探求をより困難なものにしている。

物語はジェラルドが反乱兵に射殺された後、ダニエルズタウンが焼き討ちにあう場面で結末を迎える。すなわち、ロイスが帰属場所とみなしたものが共に破壊されて小説は幕を閉じる。ボウエンのほとんどの作品は疎外されたヒロインを扱っており、欠如と不在がボウエン文学の根底を流れる中心的テーマであることを考えると、『最後の九月』はヒロインの〈家〉の喪失と「欠如の発見」を描くことにより、後の作品の土台を築いたのだといえる。

第二章 モダニズム以後の自己像の予告——『こころの死』——

本章は「もっともボウエン的」とされることの多い『こころの死』(*The Death of the Heart*) を、これまでとは異なる視点から読み解く試みである。『こころの死』はいささか時代遅れな伝統的教養小説として読まれてきた。しかし、テキストを注意深く分析すると、この作品がヒロインの〈形成〉ではなく、むしろ〈崩壊〉を描いたものであることが明らかになる。また、モダニズムの衰退期に書かれたこの小説は、新たな段階に踏み出す必要に迫られていた当時の文学的状况を実に鮮やかに映し出している。モダニズムに対する失望や幻滅が色濃く現れているだけでなく、後にポストモダニズムの特徴として指摘されることになる現象——主体の不在、深層から表層への重点の移行、個性の消滅など——を予告する要素を、驚くほど多く持ち合わせている。この作品はヒロインの〈内面の死〉をドラマタイズすることにより、モダニズムから次の段階へのひとつの転換点を体現しているのである。

まず、リアリズムの規範に反するものとして批判的に論じられてきたボウエンの作品の特徴に着目して、『こころの死』における深層から表層への重点の移行を分析する。ボウエンの特異なシンタックスは、しばしば単なるマンネリズムとして切り捨てられてきた。しかし、こうした文体上の特徴は、作品の主題と切り離せない関係にある。たとえば、二重否定の多用は、エディーに代表される否定的自己規定——自分ではないものによってのみ自分を定義できるという逆説——が、否定構文の形をとって語りの文にも浸透していると理解することができる。また、〈空洞〉や〈荒廃〉が支配し、人物が場所に埋没してしまうような場面描写は、個々の人間の実体が崩壊し従来の意味での〈人物〉が成立し得なくなったことの、ひとつの現れと読める。『こころの死』はヒロインのポーシャが、このような〈不在〉の世界に異分子として導入され、最後には内面の死を経験する過程を描いている。

さらに、モダニズムの代表作のひとつであるヴァージニア・ウルフの『灯台へ』の一節をボウエンのテキストと比較することにより、両者の間の顕著な対照、とりわけ語りの技法の相違を考察する。ウルフの〈意識の流れ〉の手法がボウエンにあっては〈会話の流れ〉に取って代られるのだが、このことは〈表層化〉の一端ともなすことにより、モダニズムからの離脱を表していると読める。『こころの死』の結末は、ボウエンのより subversive な側面を従来の批評がいかに歪曲あるいは無視してきたかを示す好例である。

第三章 二重の視線——『日ざかり』——

『日ざかり』(*The Heat of the Day*) は第二次大戦下のロンドンを舞台に繰り広げられる戦争と裏切りについての物語である。日常的な風景の中で展開されることの多いボウエンの小説の中では異色であって、批評家の評価が多様に分かれる作品だ。とりわけ裏切り者のロバートが「説得力に欠ける」という指摘が何度もされてきた。こうした批判に共通して見出せるのは、『日ざかり』をリアリズム小説ときめこみ、その枠組みからはみ出る要素を弱点として退けようとする観点である。本章では、この作品が〈解読の不可能性〉を主題とする反リアリスティックな小説であることを検証し、ロバートがそもそも説得力を欠く人物として意図されていたことを明らかにする。

『日ざかり』は大衆スパイ小説の枠組みを巧みに利用することによって、主人公ステラが恋人ロバートに関する真実を把握しようと試み、それに挫折する過程を効果的にドラマタイズすることに成功している。作品の要となるのは、ステラとロバート双方の分身的役割を演じるハリソンである。逆スパイのハリソンが体现する〈二重の視線〉は、プロパガンダの支配する第二次大戦下に人々の間に広まった懐疑的深読みの習慣を色濃く反映している。さらに、三人の人物間の監視と演技の錯綜した関係を描くことで、人間存在の虚構性が強調されている。〈二重の視線〉を通してあらゆるものが演技に見えてくる戦争の劇場性が、戦時中に限られた現象としてではなくより普遍的な問題として掘り下げられていて、そこにこの作品の特徴があるといえるだろう。また、ステラとロバート、ステラとハリソンの対照的な関係は、物語というものが人間の現実認識をいかに左右するかを浮彫りにしている。多くの批評家の評言にもかかわらず、ボウエンの小説において、自己は単一の自律した存在ではなく、物語と演技が現実と実体を凌駕している。『日ざかり』は、リアリズム小説の依拠する人間の主体についての基本前提そのものに疑問を呈しているのである。

また、ロバートは一個の〈人物〉としてのみならず、裏切り者としても説得力を欠く必要があった。動機の説明できない裏切りの例をあえて提示することにより、『日ざかり』は国とは何かという根本的な問いを投げかけている。こうした懐疑的な国の表象は、ボウエンのアングロ・アイリッシュとしての出自、さらには第二次大戦中に彼女の行った諜報活動と密接に関わっており、作者の国への帰属意識の揺らぎを映し出していると考えられるであろう。

第四章 子宮への回帰—『イヴァ・トラウト』—

本章では、遺作『イヴァ・トラウト』(*Eva Trout or Changing Scenes*)をとり上げ、ボウエン文学の中心的テーマのひとつであり、本論でも度々言及してきた言語と主体の関係に焦点を絞って考察する。これまで批評家の間で『イヴァ・トラウト』の評価はきわめて低く、ボウエンの駄作であるとする意見もあった。とりわけ、人物描写に深みがない、あるいはプロット展開が強引で不自然であるなど、リアリズムの規範から逸脱する点がしばしば批判の対象とされてきた。しかしながら、この小説はボウエンの作品中でもリアリズムの領域からはもっともかけ離れた荒唐無稽なファンタジーであり、こうした批判は的外れであるといわざるをえない。虚構と現実の交錯するファンタジーの要素を巧みに利用することにより、この作品はリアリズムの基本前提となる人物および現実の概念をくつつがえしている。中期以前の小説に端的に現れていた喪失感もはや見受けられず、流動的で多様な自己の可能性と戯れる感がある。

主人公イヴァは「並外れた/実物より大きい」(larger-than-life)人物として描かれ、既存の概念の枠組を次々と壊していくため、他の人物から「怪物」とみなされる存在である。アウトサイダーとしてのイヴァの立場は、彼女が言語をうまく操れないことと密接に関連している。ボウエンの小説には言語表現に不自由を感じ、社会に適應できない女性がしばしば登場するが、イヴァはそのもっとも顕著な例である。言語の修得に失敗し、いわば〈象徴界〉の周縁に位置するイヴァは、言語修得以前の、すなわち主体の形成される前段階の共生的母子関係を渴望するが、その欲求を満たしてくれる相手を見出すことができない。母の探求に挫折したイヴァは自らが母となり、聾啞の息子と言語の介在しない視覚的世界を創造しようとし、結局その息子の手にかかって殺害される。言語によって捉えることの不可能な〈想像界〉への回帰願望は、幻想文学のひとつの大きな特徴であるが、ボウエンにおける〈想像界〉への回帰の試みは、現実逃避のユートピア願望ではけっしてない。『イヴァ・トラウト』は、抑圧された原初の記憶を活性化し、既成の現実認識を問い直すと同時に、言語と主体の結びつきに光をあてることによって人間の主体がいかに文化的に構築されたものであるかを示すことに成功している。

また、理想的な母子関係の希求と言語障害の問題は、著者の伝記的背景とも関わっている。ボウエンはきわめて密接な関係にあった母親を幼少時に亡くし大きな精神的打撃を受けており、また、同じ時期に吃音の癖がついて一生それを克服できなかったという。『イヴァ・トラウト』は著者が自分自身の根底に存在する問題をこれまでにないほど正面からとり上げた作品であるといえる。一見軽妙でユーモアに満ちたこの小説が、読者の心の深部を揺さぶる不思議な力をもつことは、このことと無関係ではないだろう。

結 論

ボウエンの四つの小説を崩れていく主体の問題に焦点を絞って考察することにより、作品中に現れるラディカルな自己像が次第にポストモダンの文脈に移行していくことが明らかになった。四十年以上にわたって執筆活動を行い、時代の変遷を

貪欲に吸収しつづけたこの作家の感性は特筆に値する。また、これまで見てきたことは、ボウエンの小説がゴシック、スパ
イ小説、ファンタジーなど、いかに多様なジャンルをとり込んで融合しているかを示している。本論で扱った作品以外にも、
ボウエンは六つの小説、八十近い秀逸な短編小説、および相当な量の書評や批評を遺している。

ある批評家が最近述べている通り、ボウエンを明確に位置づけることはいまだに困難である。その最大の理由は、著者と
その作品がともに安易な分類を拒むからだ。ボウエンの描く人物は常に「意識的に移動しつづけて」いる。同様に、作者自
身もイギリスとアイルランドの間を、あるいはジャンルの境界を横切りつづけた。ボウエン文学の捉えがたさは主としてこ
のことに起因している。

ボウエンが亡くなった際に、彼女の再評価の必要性が指摘された。しかし、死後四半世紀以上たった今なお、この作家が
十分な評価を得たとはいいがたい。たとえばウルフに関する書誌の膨大な量と比較しても、不当に軽んじられてきたと考
えざるをえない。今年がボウエンの生誕百周年でもあり、この優れた作家の価値を見直す時期に来ている。多くの批評家が
め込んできた型を外すとき、また別のボウエン像が現れるはずである。本論がその試みの一助となることを願う。

論文審査の結果の要旨

アイルランド出身のエリザベス・ボウエン（1899-1973）は世代的にはヴァージニア・ウルフ（1882-1941）よりも少し
後の作家ということになる。モダニズムにやや乗り遅れた格好に見えるボウエンは伝統的リアリズムに則った風俗小説の作
家として考えられることが多いが、物語展開、文体、イメージなどに一風変わったところがあって、なかなかその本質が掴
みにくい。そういうこともあってか、我が国では彼女に関する本格的な研究は殆どなされてこなかった。そんな状況の中で、
本論はボウエンの小説四作を時代順に取り上げて、そこに現れる人物の「主体」の概念を精査することにより、モダニズム
からポストモダニズムへと移行する時代精神が作品中に反映されていることを論証し、ボウエンの全体像を明確にしようと
試みるものである。

最初に取り上げられるのは作者の長編第二作で、1920年の内乱時に於けるアイルランドを舞台にした『最後の九月』
（1929）である。主人公ロイスは自分の属するアングロ・アイリッシュの支配階級が衰退していくのを認識すると同時に、自
身の女性としてのアイデンティティーに徐々に目覚めていく。この小説は全体としては抑制されたりアリズムの雰囲気が強
いが、その中で突出して印象的な、悪夢のような瞬間が二度ある。これはどちらもロイスが反乱軍の兵士に遭遇する場面で、
論者は上述の二つの主題がそこに凝縮して表現されていると主張し、それをテキストの一字一句にこだわりながら丁寧な分
析で裏付けている。そして、ここでロイスの発見する〈内面の欠如〉が以後の小説で主要なテーマとして繰り返し現れるこ
と、また、この後発展することになる〈言語のネットワークの中にしか存在しない主体〉という概念が既にここで芽生えつ
つあること、を指摘する。

『こころの死』（1938）を扱う章は、論全体を通じて最も優れた作品論となっている。ボウエンの最高傑作と言われるこの
小説はこれまで概ね主人公ポーシャの成長を描いたビルドゥングスromanとして読まれてきた。これに対して論者は、ヒロ
インの成長を云々することは成長するべき「自己」の存在を前提としているが、この作品ではそこが疑問視されている、と
述べる。モダニズム文学に於いては「内面の深みを探る」といったような、「深層」の比喩が支配的であるが、『こころの死』
の言語は逆に「表面」を強調する。重要な登場人物の一人エディーは「自分が自分であるというのはロマン主義的な誤謬で、
はっきりしているのは自分は他の人物ではない、ということだけだ」と言う。否定形によるこの逆説的な自己規定は本質的
な自己というものを定義しない。自己の本質があるべき場所は穴が開いたまま残されている。このエディーという人物はさ
ながらカメレオンのように人格が変化し、彼の行動は非常にしばしば演技に喩えられ、彼の目の奥には「空洞がある」と描
写される。つまり彼は「深層」のない、「表面」だけの人間である。論者は、これはエディーだけにとどまらず、他の人物に
についても言えることだとし、さらに背景描写（特に建物の描写）に於いても二重否定形、劇場に関する比喩、空洞のイメ
ージが頻出することを指摘する。要するに、主人公ポーシャは「不在」の空間に生き、「表層」の人物と接触し、内面の死を経
験するのである。確かにこの方が、ヒロインの成長を読む解釈よりも、小説の題名に相応しい。最後に論者はウルフの『灯
台へ』（1927）と比較することで、この小説が如何に会話に多くを依存しているかを示し、これはボウエンが「深層」よりも
「表面」を強調していることの現れだと述べる。そう考えると、この作品の中で一カ所だけ、結末近くに突如内的独白が出現
するのは、〈意識の流れ〉の手法に対するパロディーだという指摘も納得がいく。『こころの死』にはモダニズムからの離脱

が認められるという論者の主張は、以上のような緻密な論証に基づき、説得力を持つものである。

『日ざかり』(1949)は戦時中のロンドンを舞台にした一種のスパイ小説である。ある日主人公ステラに接近してきたハリソンという男が、彼女の恋人ロバートがドイツのスパイであると告げるところから始まり、物語はステラがロバートの正体を探る過程を描く。この小説については、ロバートの行動の動機がはっきりせず、この人物に現実感がない、という批判がこれまでしばしばなされてきた。論者はこれは当然のことで、現実感のある主体というのは幻想である、という点こそがまさにこの小説の眼目なのだと主張する。これは単に気の利いた逆説のようでもあるが、この小説に頻出する「演技」「劇場」などの比喩が『こころの死』から発展したものだとする論証には説得力があり、本論全体の文脈に即して考えると、無視できない読みの可能性を提示している。

最後に扱われるのは「怪物」と呼ばれる大柄な女性を主人公にした『イヴァ・トラウト』(1969)である。論者は、ヒロインを特徴づけている最も重要な点は彼女が言葉を操ることに不自由を感じ、社会に適応出来ないことだと指摘した上で、その彼女が聾啞者の養子をとるという物語の展開は、言語習得以前の母子関係を彼女が希求することを象徴したものだと述べる。そこから敷衍して、アウトサイダーでしかあり得ないイヴァを通じて、この小説は人間の「主体」が如何に言語的に構築されたものであるかを示している、と論は続く。その前提に立つと、深みのない人物描写、リアリズムの範囲を逸脱する荒唐無稽なプロット展開などが批判され、従来評価の低かったこの小説を、ボウエンのポストモダン的な意識が現れたものとして見直すことが可能になってくる。

論者はモダニズムからポストモダニズムに至る過渡期の作家としてのボウエンの姿を明確な形で提示することに成功した。単なる風俗小説家として読むとなかなかわかりにくい作家であるだけに、本論の意義は大きいと思われる。ただ、ここには確かにボウエンの代表作というべき作品が取り上げられてはいるものの、考察されていない長編小説も六作あり、それらも視野に入れた場合にはこれだけきれいな結論が導けるかどうか、若干疑問は残る。しかし、それは本論の優秀性を根本的に覆すものではない。なお、『こころの死』に関する論考は海外の学術誌に掲載されることが既に決まっており、そのことも本論の水準の高さをはっきりと示しているであろう。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。1999年12月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。